

法政就業力通信

～今月のさんぽ道～

法政大学

「就業力を育てる3ステップシステム」
プロジェクト<http://3dep.hosei.ac.jp/>**就業力**を育てる3ステップシステム

仕事のワクワク感を伝える

教授 藤村博之（ふじむら ひろゆき） プロジェクトリーダー

若者たちの仕事観の危うさ

現在の大学生を見ていると、働くことについて「たいへんだ」というイメージしか持っていないように思います。卒業して働いている先輩たちの話を聞くと、「労働時間が長くて自分の時間が持てない」、「ノルマがきつくて上司からいつもおこられている」、「顧客の要求が厳しいので対応に苦労している」という声が圧倒的に多く出てきます。

学生にとって最も身近な職業人は親ですが、親たちは決して楽しそうに仕事をしていないようです。毎日、疲れた親の姿を見て育った若者たちが、学校を卒業して働くという局面になったとき、働くことに前向きになれるとは思えません。

仕事は、自分自身の取組姿勢と工夫の仕方によって、ワクワクしたり、おもしろかったりするはずですが、それを感じられない若者が多いのは問題です。仕事は金を稼ぐための手段であって、仕事以外の時間を楽しむための必要悪と考える若者が増えてしまうのは、何とも寂しい気がします。

企業側からのメッセージが必要だ！

「働くって、こんなにおもしろいぞ！」「私たちと一緒に、ワクワクするような仕事をしよう！」というメッセージが企業側から大学に発信されれば、学生たちの仕事に対する考え方が変わると思います。

まず、「世の中に元々おもしろい仕事はない」ことをわからせる必要があります。与えられることに慣れている、教えられることに慣れている若者たちは、世の中に元々おもしろい仕事があると思っています。それを探るのが就職活動だと勘違いしています。そうではなく、仕事をおもしろくするのは自分自身であることをしっかり伝える必要があります。

若者に繰り返し語ることは大人の使命

仕事のおもしろさを知るには、まず、仕事に関する知識が必要です。その企業が提供している財やサービスについての知識に始まり、業界の仕組み、他社との協業関係など、たくさんのことを知らないと仕事の本質はわかりません。常に勉強することが大切です。「働くようになって、勉強の必要性が初めてわかった」という先輩たちはたくさんいます。

仕事は他の人との協力関係で成り立っています。仲間や取引先との良好なコミュニケーションなしに仕事は成り立ちません。コミュニケーションが大切なのは、力を合わせないといい仕事ができないからです。

また、困難な状況に直面してもあきらめず、挑戦し続けて、やり遂げることが必要です。そのエネルギーの源泉は使命感です。世の中に困っている人がいて、その人の困った状態を改善する財・サービスを提供したいという思いが人を困難に立ち向かわせるのです。

学生に仕事のワクワク感を伝えるのは簡単ではありません。でも、仕事のおもしろさを若者に語るのは私たち大人の責務です。「自分も将来、あんな仕事ができる職業人になりたい」と若者から思ってもらえるような大人になりたいですね。



略歴

84年名古屋大学大学院卒
京都大学博士(経済学)。

84～89年京都大学経済研究所
助手、90～97年滋賀大学経済
学部助教授・教授。

97年～03年法政大学経営学部
教授、04年～IM研究科教授。

e-mail:

fhcdc@hosei.ac.jp

研究室は新一口坂校舎4F



略歴 法政大学大学院経営学研究所キャリアデザイン学専攻(修士)卒業後、法政大学大学院政策創造研究科博士後期課程に進学。
2011年3月、同博士課程中退。

若者が安心して学べる環境作りを

特任教員 白井 章詞 (しらい しょうじ)

自民党が政権与党に返り咲き、民主党政権下に作られた政策の見直しが進められています。高等教育政策の行方についても気になるところです。2018年以降、18歳人口が急激に減少することを考えれば、大学淘汰も現実味を帯びてきます。日本よりひと足先に大学全入時代を迎えた韓国では、高等教育の質保証を目的として、政府主導による大学の統廃合が事実上すすめられています。4年生大学であれば8つの指標(専門大学は9つ)で評価され、下位の大学にはペナルティーがあります。その指標の1つが就職率であり、評価全体の20%を占めます。大学のなかには、就職に不利な学科の改編や問題を孕んだ就職支援も行なわれており、教育機関としての本質が揺らいでいるようにも思えます。新たにスタートしたGPにおいては、産業界のニーズを汲み取るだけでなく、若者が安心して学べる環境、安心して働ける環境作りも、一緒に考えていきたいと思っています。



略歴 70年度応義塾大学経済学部卒。
70-06年伊藤忠商事(株)勤務、06-11年帝京大学と法政大学職員。
11年-法政大学教員

働く力測定ツールの完成報告

特任教員 有田 五郎 (ありた ごろう)

昨年11月の第20号文面でご紹介した働く力測定ツールが完成しました。2月に本学と東京家政大学で学生約150名が受検、各自の今後活かせる力と強化すべき力を把握する機会となりました。

二つのテストを組合せたことでその一方では見えなかった側面を捉えるのが一番の特長と改めて認識した次第です。ペーパーテストは選択回答にヒアリングや文章回答を加えて今迄のマークシートから一段階レベルアップしたものとしました。ビジネスゲームはチームメンバーに自分の考えを説明する姿、おとなしそうな学生が積極的な行動に出る姿、他チームとの交渉や協力…、やはり座っては見せない

一人一人の良い面を評価・フィードバックする仕組みとなっています。



略歴: 日米ハイテク企業での営業・人事を経て人事コンサルタントとして独立。キャリアカウンセラー資格取得後は多くの大学でキャリア論の講師を務める。

他大学への出前講義

特任教員 鈴木 美伸 (すずき よしのぶ)

教材ビデオの研究会(ワークショップ)にご参加された他大学の職員の方からお誘いを戴き、学外の出前講義を行って参りました。キャリアセンター主催ということで、就職活動を控えた3年生約100名が受講してくれましたが、やはり学生の関心は、業界研究(今回は旅行代理店編を使用)とグループディスカッション・スキルとの2つでした。

教材ビデオは進行を工夫することによって、職業指導にも活用できます。しかし、就職テクニックを求める学生からは、物足りなかったとの感想もありました。そこで、同校には後日改めて実践型グループディスカッションのセミナーも行って参りました。早期化に煽られて焦る就活生には仕方がないことですが、本質の教育と実践的な職業支援は、相反するものではないことも指導していきたいものです。

◆ 教材ビデオシリーズ3・4がまもなく完成

昨年度より本プロジェクトで製作しております実際に社会で働くときに突き当たるであろう「様々な場面」を想定した、「働く力」を身につける教材ビデオの第3弾・第4弾の撮影・編集が順調に進んでいます。今回のテーマは「グローバル企業編」と「専門商社編」です。前者はグローバル化の本質は、外国語を流暢に話すことではなく、自国の文化を知った上で相手の文化を理解し、両者の差を認識してコミュニケーションをとっていくことを理解させるというお話です。後者では専門商社は、どのような経緯で世界中にネットワークを広げて行ったのか、そこで活躍する人材は、どのようなコミュニケーション力を発揮しているのかを探ります。

- ◆ 編集後記：催事販売型インターンシップも佳境に入ってきました。学生たちの企画も固まり、3月の店舗販売に向けて動き出しています。順調に進んでいるグループもあれば、なかなか思うように進まないグループもあり、学生たちも学園祭の模擬店やアルバイトとは違った「物を売る」ということの難しさを肌で感じながら四苦八苦しています。例えば先方に電話一本しておかなかったために、商店街の人たちの貴重なアドバイスを逃すということもありました。会計学ではチャンスロス(機会損失)という言葉があります。こうしておけばよかったと後悔するより、とりあえずやってみようという選択ができるのも学生の特権です。CMではありませんが「いつやるか? 今でしょ!」ということで、多少のことにめげずに頑張ってください。≪事務局: 平山≫

「就業力を育てる3ステップシステム」プロジェクト(事務局: 学務部教育支援課)

〒102-8160 東京都千代田区富士見 2-17-1

TEL: 03-3264-9520 WEB: <http://3dep.hosei.ac.jp/>

就業力を育てる3ステップシステム